

戦時下の思い（集団疎開の生活から）

伊藤 嘉朗（昭和7年生まれ）

昭和19年、当時私は東京市麹町区立番町国民学校初等科の6年生だった。

開戦3年目にして戦況日毎に不利となり、この年の1月26日に東京・名古屋に「改正防空法による初の疎開命令」が出された(1)。このため私たちも二学期から集団疎開することになった。

昭和19年8月の末に東京を出発した。疎開先は当時の山梨県南都留郡福地村字富士吉田（現在の富士吉田市）、浅間神社の恩師(2)の広大なお宅が私たち6年1組男子37名の宿となった。他の男子組や女子組もそれぞれ恩師のお宅にお世話になることになった。疎開当初は、未知の土地での生活に多少の期待や好奇心もあった。

私たちの日常生活は、6~7人で構成した班を中心にした生活だった。清掃、食事運搬、風呂たき、学習、運動などすべての当番活動を全員で分担した。各班長が先生や寮母さんと話し合い、全員の考えや意見を吸い上げる班長会も週に一回実施された。

しかし所詮は東京山の手のお屋敷町のお坊ちゃん集団の共同生活である。四六時中先生や友達と過ごす規律節制、共同互助のくらしに長期間適応することは困難であった。

中でも最大の原因は「食糧不足」だった。米軍機が東京を爆撃した11月の末頃(3)から、日に3度の食事の量と質が目に見えて変化してきた。先生方や地元関係者の絶大な努力にもかかわらず、食糧事情は益々悪化するばかりだった。大豆、芋などの混じったご飯が、いつの間にかおかゆになり、さらに、そのおかゆもやがては、とうもろこしの粉をにぎって焼いた団子になってしまった。副菜は味の薄い実のないみそ汁と少量のつけものだけになった。

栄養不足のため風邪をひくとすぐ余病を併発する友だちが増え、寒さが厳しくなるにつれて病人の数も多くなってきた。

周囲の大人たちから毎日のように聞かされてきた「疎開は勝つため、国のため」ということばも何か空しく、また朝夕仰ぎ見る富士のお山にも何の感動も覚えない日々が続いた。とにかく何でもいいから「腹いっぱい食べたい」と思う毎日だった。

自由時間になると班の仲間と外に出て、道端の雑草や木の皮を口に入れ、よくかんでから吐き出す。こんな事が日常茶飯事になった。また、宿のすぐそばの薬局へ行き、班員が平等に抛出したこづかいで胃腸薬の「わかもと」や「ピオヘルミン」を買い、2~3粒ずつ分け合って口に入れ溶けてなくなるまで「食」の感触を味わったりした。

しかし戦時下の統制による薬品不足、私たちの資金切れ、薬局から先生への通報などでこの秘密の楽しみもいつしかなくなってしまった。このような耐乏生活は昭和20年3月1日に東京の自宅へ帰ってからもずっと続いたのだ。

戦争末期は「ほしがりません勝つまでは」が私たち子供の合いことばだった。でも私たちは無しように欲しかった。食べ物だけでなく、本も、ノートも、鉛筆も。遊び道具も、洋服も、ズックも欲しかった。

集団疎開を体験した私には「もったいない」の精神がしみこんでいる。そして、今でも3度の食事を食べ残すことに苦痛を感じてしまう。やむを得ず残す場合でも、常に罪悪感に襲われてしまう。ある意味では、戦争当時に感じていた少年期の飢餓意識からいまだに解放されていないのだと思う。

21世紀を生きる今の子供たちには、決してこのような思いをさせてはならない。

(注) (1)、(3)は日本史小年表(山川出版)より、(2)は(浅間神社の祭事を掌る神官)